

解を経て T. の思索は深化してゆくので全体像が全てみえるわけではないの言うまでもない。特に個体化の問題など後にまた再考されていく。

第1部の研究編は B. と T. の思想史的な考察を主に扱っているが、中世哲学一般へのよき入門ともなる。懇切丁寧な解説とあいまって T. 自身の手になる T. 哲学へのよき入門書であるともいえよう。

待ちに待った本書の刊行は、これから中世哲学を志す者たちにとってもよき指標を与えることになろう。御出版をお祝いし、著者の研鑽の跡に敬意を表するとともに、ご健康とこれからの更なるご研究の進展を心からお祈りするばかりである。

田島照久著『マイスター・エックハルト研究
——思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論——』

創文社、1996年、xxxii+379+22頁。

川 崎 幸 夫

本書の狙ひを通観するために、「あとがき」における説明を採用するならば、著者はエックハルトの思惟にみられる独自性を「存在・創造・誕生」の重り合ふ「トリアーデ構造」と名づけ、これを解釈することが「エックハルトの思想の全体的眺望を獲得するのに有効」であると確信した上で、三様の視法にしたがって展開される思惟が「相即連関し、問題互換の動的関係において統合されている」境域に向って薫直向前提とする意欲を逆しらせてゐる。著者の姿勢は極めて大膽卒直であり、馬上試合に臨むが如き気概には深く共感させられる。

著者はエックハルトの主著といふべき『三部作』の「命題論集」において第一命題に挙げられた「存在は神である」を拠所として神の本質をまづ存在に見出し、一切の被造的存在の神に対する絶対的な依存性がスコラ哲学全体を振り返ってみても比類なきほどに至るまで徹底されていゝることに着目してゐる。更にこの第一命題は、「創世記」の冒頭つまり聖書全体の冒頭に置かれ、また「ヨハネ伝」の冒頭でも意図的に反復された「始に」(In principio)の一句の解釈とエックハルト自身によって深く呼応させられてをり、著者はこれに立脚して存在論を直ちに始原論と照応させ、また存在

の原理たる父より発出した始原的ロゴスによって創造された被造物の神に対する依存関係を、アナロギアの論理で整合化しようと試みてゐる。しかしながら著者は更に一歩を進めて、エックハルトにおける創造論が存在論を確立してゐるだけでなく、永遠なるロゴスを語る神の自己認識の問題としても新たな展開をみせてみると考へ、ロゴス誕生の本来的な場所を、被造性から離脱して神の自己認識を自らに重ね合せた魂の根柢に見出してゐる。かくして創造論は純粹な知性としての神の思惟が、永遠な今としての始原において、各瞬間毎にロゴスを誕生させるといふ「継続的創造」の形をとると解釈されることになり、ここに神の本質規定は存在の優位から知性認識の優位へと逆転させられてゐる。以上のやうに描出されたエックハルトにおける思惟の動態を著者はプロティノスにまで遡らせた否定神学を貫く「一者論」の血脈に結びつけ、「一である限りの一」といふ観点の論理構造の精細な思量が行はれてゐる。大略このやうな構想に導かれて、本書の結構は第一章「存在 (esse) をめぐる思惟」、第二章「神と被造物のエッセをめぐるアナロギア論」、第三章「創造 (creatio) をめぐる思惟」、第四章「誕生 (generatio) をめぐる思惟」、第五章「救済論的一 (unum) の通景」といふ風に組立てられてゐる。

ところで本書を手にとつた人は『マイスター・エックハルト研究』といふ一見平凡な書名に添へられた「——思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論——」といふ破天荒な副題に接して、誰しも驚愕の念をおぼえるのではなからうか。その「トリアーデ構造」の一翼を担はされる esse においては、万物の創造主としてただ一語のみを語つた神の自己定立が宣明され、creatio においては、神の発した一語の内にさまざまな被造物のアイデアがすべて語り入れられてゐることによって、世界の開演が表示され、更に generatio においては、神の言葉として父と同一の本性をもつ御子が世界の内に発出さるべき場所は我性を掃蕩し了へた魂の根柢にはかならぬことが見出されることによつて、一者 (unum) に基づく救済論が含蓄されてゐる。この三様の神の働きは、著者によると「静的な三層構造」をなすのではなく、「相互参差し、相即関連し」合ふ「動的な連関において、つまり三重にたたみこまれることによって、主張の立処が常に互換される」(x 頁) ごとき特異な方法論を形成してをり、それが「トリアーデ構造」と命名されてゐるのである。さうしてかかる「トリアーデ構造は当然第一に神の側で語られる事柄」(ix 頁) とされながら、それはまた同時にエックハルト自身の独自の思惟構造 (x 頁) を示すものと理解されてゐる。「動的な

連関」といふことに対しては評者の方でも何の異論もないが、「トリアーデ構造」といふ命名に付された説明だけでは納得し切れないものが残る。

評者の臆測するところでは、「トリアーデ」といふ表現はギリシア語数詞 *τριάς* もしくはその複数形の *τριάδες* に由来し、それをドイツ語の発音に合わせて表記されたものであろう。ギリシア語の *τριάς* は数詞3のほかにも、三つの要素からなる一つの組合せを意味し、Lampe の *A Patristic Greek Lexicon* には、「男・女・子供」、「気概・欲望・理性推理」、「肉・生魂・霊」のほかにも、パウロの「信仰・希望・愛」を「聖なる三つ組」と呼んだクレメンスの用例のほかにも、グノーシス派および反グノーシス派の用例が挙げられてゐる。更にこの語は「神のペルソナの三性」或いは「三位一体」を表示する神学用語として採択され、オリゲネスらの用例が数多く示されてゐる。「三位一体」の意味で語られた *τριάς* がラテン語に移植されて *trinitas* となつたのは容易に思ひつくことであらう。しかし「トリアーデ」といふドイツ語化された語形の元になったのはプロクロスに類出する用例であらう。評者の知識は *W. Beierwaltes, Proklos* に拠つてゐるに過ぎないが、*Beierwaltes* はプロクロスの *τριάς* を思惟と存在の「弁証法的統一」の形象と見做して、そのさまざまな場合を詳細に説いてゐる。近代において、プロクロスに強く影響された哲学者といへばヘーゲルがまづ挙げられる。ヘーゲルは *Trias* のドイツ語化を一層推進し、*Dreieinigkeit* (三性) 乃至 *Dreiheit* (三つ組) と置換へ、新プラトン主義、特にプロクロスの形而上学体系やキリスト教教理の弁証法的構造の表現と見做しただけではなく、カントの範疇論やフィヒテの知識学にも見出される理性の根本形式として捉へ、更に正・反・合といふ否定的媒介の過程を経て展開される自らの弁証法論理を特徴づけるキー・ワードとして重要視したことは周知のことであらう。

「トリアーデ構造」といふ表現を西洋的思惟の伝統に位置づけて眺めると以上のごとき相貌を呈すると思はれるが、もしこれ以外に採上げるものがないとすると、著者によつて「三重」もしくは「三重にたたみこまれ」た *esse・creatio・generatio* の「動的関係」と説明されてゐる「トリアーデ構造」を一体どのやうな仕方で論理的に把握したらよいのであろうか。おそらく著者は「たたみこまれ」た情態を、*plico* といふ動詞に由来するエックハルトに特有な「反復語法」*reduplicatio* を採入れた表現形式に結びつけ、アリストテレス以来存在論における蝶番の役割を演じてきた *inquantum* の語を折目にして、同じものを折重ねることが思惟の自己同一と純粋性を高

める働きをする手法 (35頁以下) に結びつけてあるのであらう。著者はエックハルトの思惟、特にドイツ語説教において精彩を秀発してゐる誕生の思惟様式の内に高度に弁証法的なものの蹤跡を認めようとしてをり、評者もこの点に賛意を表するのに奮さかではない。しかし *esse・creatio・generatio* の三者はどこまでも永遠の今としての始原において同時に発生する等しく永遠なる出来事であり、著者がいふやうに「一なる神の言葉において、存在・創造・誕生の一切が露わにされる」(xix 頁)ものとして受取られなければならない。それゆゑに三者は弁証法論理のごとくに *esse→creatio→generatio* といふ過程をとほして、真理全体が次第を追ひつつ実現されてゆくやうなものではありえない。とはいへ「トリアーデ」をオリゲネス的な三位一体に対応するものと捉へて、*esse* を父に、*creatio* を子に、*generatio* を聖靈に割振らうとするのも当を得ないであらう。さうするとクレメンスに見られるやうな、共通した性質を具へ、弁証法の輪廓を漠然と示してゐる「三つ組」としての *τριάς* に近似すると受取るのが適切かも知れないが、その点果して著者はどう考へてをられるのであらうか。

さて書評といふ形で本書を採上げておきながら、未だ玄関先でまごついてゐる間に早くも豫定されてゐた紙数が尽きてしまひ、稔ゆたかな研究の具体的な中味に入つてゆけないままに了つたことを著者にお詫びしなくてはならない。評者にとつて特に参考になつたのは、神と被造物の間を存在論的に関聯づけるためにエックハルトが導入したアナログアが後代のスアレスによつて提唱された「内的帰属の類比」にほかならないことを論証した第二章であり、トマスとのアナログア論の相違からトマス以上に徹底された「神中心的方位性」が浮彫にされ、虚無の淵に佇む被造物にとつて、その存在が単に「利那借事」のものに過ぎないことが強調される件りは気魂に溢れるものを感じさせられた。更に同じ事態を、クルト・ルー直伝の得意業と披露された「パースペクティヴ変換」の技法を揮つて、逆に神の側から語ることにより、創造主による御子の「継続的創造」の説にまで繋げてゆく丈夫風は正しく多数の正統派神学者をして瞠若たらしめるほどの庖丁捌きといへよう。

しかしながら子の誕生を父の自己認識に求めた「誕生論」から「一者論」へと到り着いたところで二つの難題が生ずる。一つは神の本性を存在の優位に見出すか、それとも知性認識の優位の方を鮮明にするのかといふ問題が再び立ち現れてくるのにどう対処されるか、である。もう一つは、存在論やアナログアが論じられてゐた際にはラ

テン語著作が典拠として採上げられてゐたのに反し、後半に移るにつれて中高ドイツ語のテキストが主役を演ずるやうになつてをり、ここにデニフレ以来の論争に逢著せざるを得なくなる。形式論理学に準拠して問題の解決を計るスコラ哲学者としてエックハルトを定位するのか、或いは弁証法的思弁に長じたドイツ的神秘思想家に彼の本領を見出すのか、それとも第三の道はあるのか、といふことである。

最後にもう一言、*esse* を論ずるに当つてはぜひ勇を奮つて日本語訳を工夫していただきたいといふことである。片仮名に転写するだけではやはり芸がないと言はざるを得ないであらう。